

防犯カメラが見ている

小川 茎

土曜日の夕方のことである。真知子が夕飯の配膳をしていると、玄関のドアが怒声まいの音を立ててバッターンと閉まり、町内会の会合から帰ってきた弘司がテーブルの上に肩掛けカバンを乱暴に投げ出した。カバンの口には今日の説明会の資料だろうか、無造作に折つてねじ込んだ印刷物が見えている。気に入らないことがあるとすぐモノに当たる弘司の性質は十二分に承知しているが、最近はひどくなる一方である。人間年を重ねると角が取れて丸くなるなんて嘘だ。年々意固地になつて傍迷惑この上ない。こういうときはあえて何も言わず、平静を装うに限る。

「まつたく、やつてらんないよ」

案の定、不平不満の凝縮したような第一声が漏れた。「なんで?」と訊くと、「反対するやつがいたんだよ。プライバシーがなんだかんだ言いやがつて」

弘司は吐き捨てるように言うと、放り投げたカバンから例の印刷物を取り出して見せた。『防犯カメラ設置についての説明会』と書かれたそれらの資料には、所々ボールペンで書き込みがしてあつた。乗り気で出掛けたのに、おそらく予想外の展開だつたのだろう。正義感に水を差された気持ちを理解できなくはない。

事の発端は、近所のゴミ置き場における不法投棄が度重なり、住民から苦情が寄せられたことにあつた。週に三日、可燃ごみ、不燃ごみ、資源ごみの収集曜日・時間が決まつていてもかかわらず、夜半か早朝にこつそり投棄する者がいる。朝になつてみると散乱した生ゴミをカラスが漁つてしたり缶やペットボトルが転がつてたりして、近隣の住民が後始末せざるを得ない。無分別のまま大量に置かれた袋を仕分け直す作業を、真知子も何度か手伝つたことがある。いつたい誰がこんな非常識なことを? 最近増えてきたシェアハウスに住んでいる学生たちの仕業に違いないとか、自転車でゴミ袋を持ってきて素早く投げ捨てて行くのを見たとか、犯人探しに躍起になつてみたものの、確たる証拠がないことには警察に通報することもできない。かといって徹夜で番をするわけにもいかず、こうなつたら町内会で話し合つて防犯カメラを設置することにしようという案が出された。

空き巣やオレオレ詐欺も横行する昨今、犯罪抑止力に繋がる防犯カメラの導入は満場一致で可決されるものと思ひきや、会合に参加した住民の中に異を唱える輩がいたために今回は保留になつたというのだ。よもや反対者がいるなど考えもしなかつた推進派は、託ち顔で会場を後にしたらしい。

「誰が反対したの?」

「ほら、銀行の頭取の邸が更地になつたあとに新しくできたテラスハウス、あそこに越してきた若い夫婦が何組かいて、カメラはどこにつけるんだとか、細かいこと言い出して」

「ああ、駐車場に高級車ばかり停まつて、お洒落な感じのお宅ね」

「実際、金持ちか何か知らないけど、家の中が見えるようだとプライバシーに関わるから、むやみにカメラを設置して欲しくないとか言い出してさ」

「若い人が賛成しないんじや、仕方ないじやない」

「それにしても言い方が気に入らない。なんでも自分の会社はＩＴ関連で、この業界ではオンとオフのルールをきちんと決めていて、休憩室とかプライベート空間には監視カメラ

はつけていない。四六時中誰かに見られているという状況はストレスになりかねない。ストレスは仕事の効率にも影響する。ましてや日常生活の中にもういったストレスを持ち込むというのはいかがなものか。場合によつてはプライバシーの侵害に当たる……とか、偉つそうに言うんだから」

三十年以上建設会社で眞面目に働いたのに大した出世もせず、薄給のまま定年を迎えるとしている弘司にしてみれば、ヤングエグゼクティブの舌鋒にしてやられた感もあり、憤懣やるかたなしといったところだろう。

「プライバシーもくそもあるかつ！ もしかすると反対するやつが犯人なんじやないか。まったく、最近の若いやつはどうかして」

やれやれ。最近の若い者は：ときたら、自分が年とつた証拠である。いずれにせよ価値観が多様な世の中、ちつぽけな町内会ですら一筋縄ではいかないということだ。防犯カメラの設置については保留になつたものの、交番の地域パトロールを強化してもらうことで同意が得られ、散会に至つたとのことだつた。

つい先日もゴミ置き場の向かいの家の老夫婦が腰をかがめてゴミを片付けていたことを思い出し、真知子もじわじわ憤りを覚えた。結局、至近距離の住民ばかりが清掃する羽目になり、被害が及ばないところの住民は素知らぬ顔で過ごしている。このまま自己中心で他人に無関心な人間が増えていたら、世の中は荒んでいく一方ではないか。

ここは気概に一票。冷蔵庫から冷えた缶ビールを取り出し、快く弘司に差し出した。

——本日午前十時、逃走していた○×容疑者は、現場から十二キロ離れた場所で身柄を拘束され、警察署で詳しい取調べを受ける予定です。

お昼のTVニュース。人相の悪い中年男が警察官に連行されていく。アナウンサーの話によると、強盗をはたらいたコンビニエンスストアの防犯カメラ映像や、沿道に設置されていた監視カメラの画像が迅速な犯人逮捕に繋がつたとか。最近のカメラは精度が上がりつてあるから人物の特定にも時間が掛からないのだろう。店内に設置された複数のカメラに捉えられた容疑者と思しき映像が公開されていたが、なるほど、落ち着きなく辺りを見回すその姿は、特徴を見て取れるくらい鮮明である。

特定の宗教を持たない人が多い我が国では、昔から「お天道様」や「世間様」が神様になり代わつて犯罪を抑制してきたというが、良心や体裁が効力を失つてしまつた最近は、専ら防犯カメラがその役割を果たしているようだ。それにしても、犯罪者の人相というのは例外なく醜い。よく童話などで悪魔が乗り移つた登場人物の顔が変貌してしまつた場面があるが、ニュースで報道される犯人の顔はどれをとっても悪の権化に見える。

いつまでもTVに見入つてゐるわけにもいかない。真知子はソファーからさくつと腰を上げた。主婦は「三食昼寝付き」などと言われるのは癪に障るから、それなりに家事に精を出すことにしている。掃除機掛けは毎日欠かさず、洗濯物は朝一で干して午後一時前には取り込む。食費を節約するためにスーパーをはしごして特売品を買い揃えるのも主婦の腕の見せ所だ。時々余裕のない自分に気づいて溜息をつくこともあるが、義務感に駆られて自転車を走らせる日々である。

駅前のスーパーに着くと、店先にセールの幟が立つていて駐輪場も混雑している。店内も同様、青果コーナーには人だかりができるていて、日替わりの限定品をゲットするのも一

苦労だ。不景気を反映してか、買い物客は特売日にばかり集中し、昼間からレジは大渋滞、買った品物を袋に入れるレジ横のテーブルもごつた返している。しばらくカゴを持つたままスペースが空くのを待っていると、ようやく端のほうが空いたので滑り込んだ。買ったものを手早く買い物袋に詰め込んでから、ふと見ると、先客の仕業だろうか、レジカゴがテーブルの上にそのまま放置されている。ただでさえ混んでいてスペースの確保が大変なのに使用済みのカゴを片付けないで置いていくなんて、非常識つたらありやしない。腹立ちは紛れにカゴをむんずと掴み、自分のカゴと重ねて片付けようとしたところ、

「？」

何か入っている。生ハムだ。真知子は一瞬躊躇したが、次の瞬間それを自分の買い物袋に入れた。ラッキー、今晚サラダにして食べてしまおう。いいじゃないか、うつかり忘れていくほうが悪いのだ。そもそも、カゴを放置していくという行為がいけない。自分が代わりにカゴを片付けてあげたのだから、これはきっと善行の報酬に違いない。そんな理論を頭の中で勝手に組み立て、そそくさとその場を後にした。

駐輪場から自転車を引き出し、帰り道を急ぐ。混んでいる大通りを抜けて、いつものように入住宅街の脇道に入る。自宅まではほんの十分足らずだが、いつになく距離が長いような気がする。しばらく自転車をこいでいるうちに先刻の幸福感は薄れ、逆に罪悪感のバロメーターが上昇し始めた。一メートル進むたびに一目盛り、また一目盛り。そして自宅に帰り着いたときにはマックスの状態になっていた。忘れ物とはいえ、他人の買ったものを盗つたら泥棒である。気付いた時点で店の人「忘れ物です」と知らせるべきだつたのだ。それをことごとく、自分は持ち帰ってしまった。いい歳をして善悪の判断もできないなんて情けない。でも、いつたん持ち帰つたものを返しに行くのも、変に思われそうだし……。隣には誰もいなかつたから、言わなければわからないんじや……。

とその時、ある重大なことに思い当つた。確かスーパーの店内には、防犯カメラが設置されていた。前にレジ待ちをしていて何気なく見上げたとき、店内が映っているモニターがあつたことを思い出した。各階に複数のカメラが設置してあるらしく、売り場の映像がランダムに切り替わっていた。買い物客の様子も結構はつきり映つていて、レジ周辺は頻繁に映し出されていた。まずい……これは、とんでもないことになつた。もしかしたら、防犯カメラに映つてしまつたかもしれない……！

俄かに全身の血が逆流し、へなへなと力が抜けた。忘れ物に気付いた客がスーパーに問い合わせ、時間と場所を特定した上で映像をチェックされるようなことになつたら、もうおしまいだ。レジ横のテーブルで、放置されているカゴに気付いて手を掛ける黒いニット帽の女。生ハムらしき商品を手にした次の瞬間……！ 間違いない、この女が犯人だ。人目を気にするように周囲を一瞥した女の顔を、レンズは見逃さなかつた。まるで悪魔に魅入られたかのような、その顔面を。

ぎやつ！ 真知子は思わず顔を覆つてその場にへたり込んでしまつた。悪の分身と化した自分が、モニターの中からケケツとせせら笑つたような気がしたのだ。魔が差すとは、まさにこういうことをいうのだろう。とにかくとんでもないことをしでかしてしまつた。このままではいられない、一体どうしたらいいのだろう……。

意氣消沈したまま買い物袋を抱え、とりあえず玄関のドアを開けて家の中に入った。

今しがた買ったものを冷蔵庫や乾物棚に移したが、問題の生ハムだけはどうしても冷蔵

庫へ入れる気になれない。リビングのテーブルの上に置いて恨めしく眺め、悪あがきとは思いつつレシートを取り出してみる。自分で買ったのではないのだから、当然生ハムの記載はない。たしか三百円ちょっととの品物のことで、こんなに苦しめられるくらいなら持つて帰つて来るんじやなかつた。しかも決定的証拠をカメラに収められたときている。

どうしよう、本当にどうしよう。頭の中に靄がかかつたようで、何も手につかない。真知子が途方にくれて生ハムと対峙しているところに、娘の由佳がやつてきた。

「うーん、よく寝た」

今年二十二歳になる由佳は今日は仕事が休みらしく、自室から出でくるなり「お腹すいたー、何かある？」と、至つて無邪気な様子である。

「あっ：ああ、今起きたの？」

平常心を装つてキッチンへ行こうとすると、由佳はテーブルの上にあつた呪いの生ハムをこともなげに摘み上げた。

「これ、食べていい？」

「そつ、それはっ：」

真知子は慌てて娘から生ハムを取り上げた。

「なによ、食べちゃだめなの」

「じ、実はね、これ、買った覚えがないの」

「どういうこと？」

「さつきスーパーに行つたら特売日ですごく混んで…。レジで清算終わつて、カゴから買い物袋に入れ替えるときに、隣の人の買ったものを間違つて入れちゃつたみたいなの…。レシートで確認したら、やつぱり買つてなくて。それで、どうしようかと思つて…」

「はア？」

「なにしろ混んでたから…そのときのこと、よく覚えてなくて…どうしよう」

真実を自白するのも決まりが悪いので、言葉を濁すしかない。母親の罪状を知つてか知らずか、由佳は呆れたように言い放つた。

「だからって、このままクヨクヨしてるわけ？」

「でも…もらうつてわけにもいかないし…」

「だからって、このままクヨクヨしてるわけ？」

「だつたら返しに行けばいいでしょ。よくいるんだよね、自分が何を買つたか覚えてなく

て、あれば入つてなかつたとか、これが入つてなかつたとか、後で言いに来る人」

和菓子の小売店に勤める娘は仕事柄そういった対応に慣れているらしく、レシートと商

品を持つていつて説明すれば問題ないと言う。

「買い物したのはどのくらい前？返しに行くんなら早いほうがいいよ。ほら、一緒に行つてあげるから」

由佳の先導で、つい三十分ほど前に通つた道を反対方向へ走る。ときぱきと行動に移し、自転車をこいでいく後姿が心強いやら、申し訳ないやら。由佳が中学生の頃、学校でちょっとした校則違反をやらかして親が呼び出されたことがあつたが、今回は完全に立場が逆転している。

スーパーに着くと、お昼時のピークを過ぎたせいか、レジもそれほど混んでいなかつた。近くにいる店員に事情を説明して商品を戻せば事足りると簡単に考えていたら、ここでも娘が主導権を握り、

「こういうときはパートやアルバイトじゃなくて、ちゃんとした人を呼んでもらって話したほうがいいよ」

はからずもクリア条件の難易度が上がってしまった。

保身を最優先に考えた末、子供に付き添われてスーパーの責任者の前に突き出される羽目になるとは本当にみつともない話だ。後悔頻り、鬱々とした気分でしばらく待っていると、職員通用口から生肉売り場の作業着を着た男性が現れた。

「お話、伺いますが」

「お忙しいところすみません、四十分くらい前にこちらで買い物をしたんですが、手違いで購入していないものを持ち帰つてしまつたみたいで」

由佳は生ハムとレシートを差し出して記載がないことを証明し、

「混んでいたので、もしかしたら袋に入れて持ち帰るときに、隣の方が買つたものを間違えて入れてしまつたのかもしれません」

と付け加えた。滑らかな口調で事の次第を説明された責任者の男性は、

「お客様がお買いになつたものは、全部あつたんですね？」

と事務的に確認して生ハムを受け取り、忙しげに奥へ消えていった。先方はクレームを警戒していたのか、こちらが問い合わせられるようなことにはならなかつた。

とにかく忌まわしき生ハムを無事に戻すことができた。もし忘れていた客が申し出たとしても、該当する商品が戻つていれば防犯カメラの画像が暴かれることもないだろう。自分はからうじて犯罪者にならずに済んだのだ。

「お昼ご飯、まだだつたね。何か食べて帰る？」

危機から救つてくれた由佳には感謝しなくてはならない。事なきを得たとはいえ、些細なことから身を滅ぼす恐ろしさを重々思い知つた。

しばらくして、ゴミ置き場の防犯カメラについての統報が入つた。弘司の話によれば、最初の説明会では難色を示していた一部の人たちが、小学生に声を掛けて連れ去ろうとした不審者の身元が防犯カメラのおかげで割り出されたという他の自治体の例を挙げたところ、急に前向きな態度に変わつたとのことだつた。異を唱える輩がいなくなり、今回は上機嫌で帰宅したのかと思えば、そういうわけでもないらしい。

「隣のＳ区やＯ区では結構前から導入されていて、不審者対策のほか、交通事故とか、通学路の安全管理の面でも効果があるっていう話をしたら、急に態度が変わつたんだ」

「ふうん、よかつたじやない」

「子供が今は幼稚園に通つてゐるけど再来年には小学校に入学するから、そのときまでに設置していくだけるとありがたい、なんて手のひら返したように言うんだぜ。結局、自分たちにとつてプラスになるかどうかが判断の基準なんだろう。ゴミ置き場が散らかつて他人が困つていようが、自分たちに直接関係なければ賛成しなかつたと思うよ。そのくせ、自分の子供が誘拐されたり事故にあつたりしたら一大事、だからな」

防犯カメラが設置されることで不審者や暴走車を抑制できるのなら、大いに結構。全会一致で可決され、次回は具体的な設置場所について検討する運びになつたらしい。

「いいじやない、設置することに決まつたんだから」

「そなたがいども、初めはプライバシーがどうのこうの言つてたくせに、見え透いてるん

だよ。ああいうタイプの人間は、ずる賢い感じがしてどうも好きになれない。大体あの若さであんな高級住宅に住めるなんて、陰で何か悪いことでもしてるんじゃないのか」

やつかみ全開、これも毎度のことと、腹にあつた一物を今さら吐き出すように愚痴る。

「こうなつたら、そいら中にカメラを取り付けたらいんだ！」正々堂々と生きていれば、一部始終撮られたつて何の問題もないじゃないか」

真知子はぎくりとした。正義漢の夫には、先日のスーパーでの出来事は話していない。

もしスーパーに防犯カメラがなかつたとしたら：他人のものを掠め取つて、バレなければそのまま過ごしていたかもしれない。自分の心の奥底にはたぶん悪魔が棲んでいるのだ。

悪魔は誰も見ていなければ顔を出すけれど、見られていることで封印される。それは保身であり、良心とは言い難い。だからこそ、お天道様ならぬ防犯カメラが目を光させていれるということか。

駅前のスーパーに着くと、真知子はいつものように買い物拭袋を脇に抱えて店内に入つた。生ハムの一件が落着しなかつたら足が遠のいていたに違いない。普段からよく利用する店なので、後ろめたいことを払拭できてよかつた。しかしあれ以来、防犯カメラの存在が気にかかるようになり、買い物中もどこから映されているのだろうと神経質に天井を見上げる癖がついた。なんとも、怪しげな客に成り下がつてしまつたものだ。

地下の食料品売り場は今日も混んでいる。お昼時、レジ渋滞もテープルコーナーの混雑も相変わらずである。先客がいなくなるのを待つて、空いたスペースを確保する。

持つて来た買い物袋に買ったものをあらかた詰め込み、その場を離れようとしたとき、「あのう」

隣にいた客が話しかけてきた。見ると、人の良さそうな白髪の男性である。

「？」

「これ：お宅のじやありませんか？」

指差す先に、ぽつんと食パンが置かれている。真知子は手短に「違います」と言つて買い物袋を肩に掛け、脇目も振らず上りエスカレーターに飛び乗つた。

外へ一歩出ると照りつける初夏の陽射しが眩しい。額の上に手をかざしながら持ち重りのする買い物袋を自転車の後ろに積み込む。さつきの食パン、どうなつたのだろう。

果たして、あの好々爺の顔がモニターの中でケケツと笑つたかどうか、それはお天道様に訊くまでもない。

（終わり）